

く知たり。自庵事は偽りなどいふものにて無之候。其上結解十郎兵衛向騰より火出る事は、蒲生家にて隠れなき事、見たる者多しと道求も語ると主水云也。十郎兵衛或時蒲生下野守殿馬場にて馬を見給ふ。大塚自庵も十郎兵衛も供に付、股立を取て突ばひ馬を見て居けるに、十郎兵衛足のおつとりより膝のあたりへ、青色の火ちよろ／＼と出けるを各見たりと也。又主水云。若狭にて十歳前後の子ども十人も二十人も集り、人の白骨・馬の白骨・襦袢などをいかほども取集め、梅木のすはえにて地を敲きかんまん／＼と云て躍れば、右の白骨初は少づつ動き、次第々々に躍出て、後には五六尺も上へ飛上り／＼するを、主水が兄見たりと常に語るといふ。雲州などにも多くある事也と、三浦勘右衛門語る。

一、柳瀬の役高德公、秀吉公と御和睦

太閤と柴田勝家と鉾桶の時、高德公は府中に被成御座候。瑞龍公は江州柳瀬へ出張、柴田家敗軍に付瑞龍公嚴敷防戦、御家臣多く戦死す。土肥但馬・富田與五郎・小塚藤右衛門・横山半記・中村豊左衛門・奥村周防其外數多あり。秀吉公は

勝家の押付に乗て越前へ亂入、直に府中へ入給ふ。安土城下にて高德公と秀吉公は御隣家にて、朝夕御心安く至極の御知音也。依之先づ御使にて、一旦は尤去事なれども、貴殿と我等事は天下の人の知たる儀なれば、是非とも和睦と仰らる。其時公俄に落髮被成て御對顔被成候。此時即座に賀州の二郡被進候。前に見えたる少し異なり

一、高德公の御女秀吉公御もらひの事

芳春夫人は秀吉公の奥方御媒にて御嫁娶。安土城下御隣家の時、備前秀家の奥方御誕生の時は、秀吉公御附被成有之候て、男兒にても女子にても、我等の子にもらひ候とて、御出生と其儘懷中被成候て御歸り、後太閤より浮田公へ嫁娶被成候。元來如此の御知音に付、勝家内々心を隔てられたるといふ。

一、佐々成政法躰となりて降参

天正十二年九月九日、佐々成政石動宮島の谷より入て、寶達山を超て末森城下へ攻来る。九日未時也。十日巳時金澤へ注進到着す。高德公即日午時過御發駕、津幡にて軍勢を待給ふ。利長公を始て追々御會議あり、夜中津幡を起ち給ふ。

拂曉に今濱に至り給ふ。成政が旗本は坪井山也。末森より一里餘あり。種村三郎四郎は成政旗本へかゝらんと云ふ。公開入不給。味方の右は不破彦三・村井又兵衛、左の方より公あがり給ふ道に堀切あり。野々木主水等姿を専途と防戦ふ。富田六左衛門太刀を眞甲にかざし、一番に堀切を越す。野村傳兵衛は鎗長ほど後より進む。山崎彦右衛門も後より續き聲を懸て、六左衛門・傳兵衛ひくな、彦右衛門つゞくぞと呼はる。野々木主水は戦死す。それより追立、敵敗北す。成政は金澤の御留守を心掛、少しにても金澤の町を焼て面にせんと行く所に、津幡に前田孫次郎百姓等を駆催し、紙旗を爲指夥敷人數を作り爲見ければ、津幡を脇に見て俱利伽羅の方へひきける。鳥越の城代目賀多又右衛門・丹羽源十郎・古澤又右衛門、鳥越を明て津幡に來る。鳥越は空城故に成政、久世又兵衛といふ大剛の者を入置き、俱利伽羅には佐々平左衛門を置いて富山の城へ歸る。同年十一月公鳥越の城を攻給ふ。城より突出て倉知猪之助と山崎庄兵衛鎗を合す。細井彌左衛門鎗下をくゞり入て猪之助と組む。倉知は手負ぬれば谷へ落、細井上に成て猪之助が首を取る。庄

兵衛より先に鷲津九藏戦死す。城堅うして引取りぬ。翌年の春小原越を被成、越中連沼を焼給ふ。其宵より賀州より敵來るとて、町人共大形遁て有合もの少し。男女撫切り引取る所へ、貴船より援兵來り難儀に及ぶ。然共村井又兵衛・不破彦三後殿し、無異儀歸陣也。十三年八月太閤松任迄御出馬也。公御迎に出給ふ。黄羅紗の長羽織に馬乗をあげ、立物七つある胃をめし、御馬より下立、御人數は道より遙に脇へ御除け、御目見の禮の如し。秀吉公三十間許にて馬より下給ひ、公の御手を取て、扱も見事なる男かな、似合申装束也。扱は去年より内藏助め表裏の事不及言語候。我等向候うへは、一たまりもなく踏澄し可申候。心安くはや／＼先へ先へと被仰、公は先へ御越に成り、金澤の城にて饗應被成、やがて打立給ひ、越中へ越給ふ。道中野も山も軍兵のみにて、成政可防戦様なくみえし。吳服山迄押詰て山上に城を築く。成政剃髮し、吳服山へ御禮に出たり。褌綴の下に小脇刺也。幕をくゞり入るとて、小脇刺の柄褌綴の胸緒にかゝり、何と仕たる哉もち／＼と見苦し。秀吉公御覽じ、隣國に又左居られ、又左は短氣人にて種々出入ありて笑止也。家來の